明治日本における西洋文化受容の一例
―英国人家庭教師エセル・ハワードの『日本の想い出』論―

山田　美穂子

＜要旨＞

エセル・ハワード（1865-1931）は明治34年すなわち1901年、近代化を急務とする日本政府の要職者によって招聘され、7年間を旧薩摩藩、島津家の子弟の家庭教師として過ごしたイギリス人女性である。その目的は、海軍を支える次世代の指導者として養育するべく、島津家の男児に英語をはじめ、健康管理から道徳教育にいたるまで西欧式教育をほどこすことであった。その在職期間に起きた1902年の日英同盟調印、1904年の日露戦争という日本の近代化とナショナリズムへの途を象徴する歴史的事件を背景に「西洋式教育」が行われた様子が、ハワードが後年出版した回想録 *Japanese Memories*（『日本の想い出』）（1918）を通して見えてくる。回想録に見いだされる具体的なコメントや人物描写などに注目すれば、そのことばを選択する語り手の思考には歴史的背景が大きく影響していること、また「受容」や「教育」との名の下ではあれ、異文化交流には双方の思想的枠組みを変革する相互作用があることがわかる。「西洋文化受容」の任務のなかで自己定義の揺らぎを体験するハワードの記述を精読することにより、近年豊かな実りを実現している「女性による旅行記・回想録の再考」という分野の一例とする。

キーワード：エセル・ハワード、20世紀初頭、レディ・トラヴェラー、日英同盟、回想録
Keywords : Ethel Howard, early 20th century, Lady traveller, Anglo-Japanese Alliance, memoirs

第１節　レディ・トラヴェラーの系譜とエセル・ハワード

「明治日本における西欧文化の受容」という問題を文学史の観点から見るにあたり、本論考では受容の結果ではなく、その過程の分析に重点をおく。西欧化されてゆく明治日本を「西欧化した当事者」がどのように観察し、その結果自身のアイデンティティについてどのような認識の変化がもたらされたか、という異文化交流の相互作用的な側面に着目したい。幕末・維新期の日本社会の変容については、西欧人による多くの日本見聞録や日誌、紀行文が出版されているが、その観点は多くの場合、好奇の目で異国の文化を見るエキゾチシズムの域を出ていない[1)]。西欧の列強諸国によるアジア圏支配の要の一つと目された日本の開国は、アメリカ・イギリス・フランス・ロシアなどの注目する項目であった。アーネスト・サトウやＡ・Ｂ・ミットフォードらイギリス外交官の記述を読むと、彼らが日本の観察者にとどまらず、その政治的動向を左右する大英帝国経営の一員でもあっ

たことがわかる。そのため、彼らの記述の関心が政治的な場面・観点に偏りがちであるのは否めない。それらと比較すると、直接に政治やアカデミックな制度の一員として活躍することのなかった（たとえば、ヴィクトリア朝の代表的なレディ・トラヴェラー、イザベラ・バードは地理学会で旅行の成果を発表することが許可されなかった）女性の手になる日本見聞録からは、男性の記述からは聞こえてこない異文化交流の実態が浮かんでくる。

ドロシー・ミドルトンの定義によれば「レディ・トラヴェラー」とは、十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて、アジア・アフリカなどのいわゆる「未開」地域を単身、みずからの意志と資金で旅行し、その記録を残した白人（おもにイギリス人）女性のことで、ほとんどの場合ミドルクラスかそれ以上の社会階級に属しており、コヴェントリー・パトモア（1823－1896）[2] のよく知られた詩のタイトルに由来し、ヴィクトリア朝社会に蔓延した「家庭の天使」（“The Angel in the House”）という女性像にならって、礼儀作法や道徳観を身につけていた（Middleton 1965, 3）。このレディ・トラヴェラーに関する評価はフェミニズムの勃興や深化するジェンダー研究の方向性によって大きく変容してきた。19世紀後半から20世紀初頭にかけて、多くの白人女性たちは現地人を救済し、男性による帝国主義的支配のありようをわずかでも改善するべく、善意と義務感をもって海外の植民地へ向かった。しかしその真の動機はやはり、当時の男性中心社会において十全な開花を望めない自分のアイデンティティを本国外で再構築することにあったのでは、という議論が、ポストコロニアル研究とフェミニズムの交差するところで起きている。近年では、「白人男性の共犯者」という罪を問うばかりでなく、彼女らが置かれた海外植民地の政治・経済・社会的な力学のなかでその経験を問い直そうとする、歴史地理学の観点から研究が行われている。

植民地における西欧人女性の存在と役割という問題をめぐり、ここで本論が取りあげる人物は、ヴィクトリア朝後期のイギリスに生まれ、1901（明治34）年から1907年までの７年間を明治日本の薩摩藩の家庭教師として過ごしたエセル・ハワード（Ethel Howard, 1865－1931）である。大家族の中産階級家庭に生まれた彼女は、若くして父親から古典と数学を学び、ヴィクトリア朝に女性が選択できる数少ない適正な職業、家庭教師の道に進む。シャム国王の甥を教える仕事を成功させたエセル・ハワードは、次にドイツ皇帝ウィルヘルム二世の子供たちの英語の教師に推薦を受け、王室からの正式な任命を受けて1895年ドイツに着任した[3]。このときの体験は『ポツダム・プリンセス』という回想録にまとめられ、1916年に出版されている。1898年、健康上の問題で辞任し、イギリスに戻っていたハワードは、このドイツ宮廷での経験が買われ、1900年、当時の駐日代理公使ホワイトヘッドからの斡旋依頼により、島津忠義公爵の男児5人の家庭教師として招聘され、1907年まで在職した。イギリス人女性の家庭教師の招致を主唱したのは、島津家の顧問の一人で、旧薩摩藩出身の総理大臣経験者、松方正義であったといわれる（『明治日本見聞録』、長岡祥三、あとがき、289）。島津家の家庭教師としての日本見聞録は *Japanese Memories*（『日本の想い出』）と題して、1918年、ロンドンで出版された。

『日本の想い出』の特徴のひとつは、著者の中途半端な立場ではないだろうか。つまり、本書は文化人類学的関心を持った研究者である旅行者や、ローレンス・オリファントのように公的人物に対して思想的影響力の強かったジャーナリスト、あるいはクロード・マクドナルドら著名な外交官たちのような、いわば日本にとっては「外部」の人間によって書かれたものではない、という点である。この書の「序」の冒頭には次のように書かれている：「この本の内容は、日本の貴族の家庭に七年間滞在した私の主として個人的な体験であり、私の日記に書き留めたことや私が未だに憶えているいろいろな想い出から拾い集めたものである[4]」。また、日本での仕事を引き受けるか否か迷っていた折、イギリスの親日家ジャーナリスト、エドウィン・アーノルド卿から「東西の架け橋をつくることができたとすれば」価値の高い業績となる、と奨励され、「この点に関して実際に私の仕事がどれだけ役に立ったか疑問に思うこともあるが、日本の貴族中の貴族ともいうべき薩摩の殿様の家庭に住み込んだ最初の外国人女性として、この本を書く資格があるのではないか」（下線による強調は論者）と述べており、あくまで文化人類学や国際関係問題に関しては「素人」の私的な見解ではあるが、異国の「内部」に潜入した最初の外国人としての親密な観察であることを巧みに強調している[5]。

そんなハワードは自分の立場についてきわめて意識的で、日本に出発する前に「私の地位を示す正式の呼び名」がなかなか決まらなかったことが懸念であったと書いている。ガーディアン（保護者）という意見を出すが賛成を得られず、ガヴァネス（住み込みの家庭教師）という呼び名に対しては「私が親のない子供たちの親代わりを勤めるわけだから不十分である」と彼女自身が反対している。ヘッド・オブ・ザ・ハウス（一家の長）でも不十分だ、といい、「公式な身分や正式の法律上の契約も未確定のまま」1901年の大晦日、「どちらかといえば中途半端な状態で」日本に向けて出発している。結局、後に彼女が確認したところでは、島津公爵家の家職（顧問）の日誌にはハワードについて「単に『家庭教師』と記されて」いたという（23）。この正式な呼び名へのこだわりと「単に…」という軽い失望の表現には、独身女性の選択できる例外的に「リスペクタブル」な職業であった家庭教師という地位に対する彼女自身の複雑な思いと、貴族の子弟を教育するのだという自負をアピールしたい、イギリス人特有の階級感覚を感じ取ることができる。

第 2 節　明治日本の国際化と日英同盟

子弟を国際的な指導者へと養成することを望む日本の貴族階級と、ヴィクトリア女王崩御の直後という象徴的なタイミングで来日したイギリス人女性エセル・ハワードとの出会いが持つ、その社会史的価値は無視できない。そしてエセル・ハワードが島津家の家庭教師として来日した背景には、20世紀初頭に緊密になった日英関係が欠かせない。そこで、ハワードが記録したエピソードとからめて、その時代背景を説明したい。

オックスフォード大学から日本近代史に関する論文を刊行している英国近代史研究家の

都筑忠七によれば、西洋文化の受容という観点から見るとき、近代日本はその始まりと経過の重要な部分をイギリスに負っている。生麦事件と、それに対するイギリスの薩摩藩への報復（軍艦による砲撃）が、日本と「西洋」とを初めて正面から向き合わせた。その出会いから生まれた一連の事件は、薩摩出身の陸軍大将・黒木為禎のことばを借りれば、近代化前夜の日本という「熱い鋼を打って鍛える」結果（ポンティング、270－71）となり、逆説的に薩摩藩を親英にさせ、幕末の開国を早める結果を生んだのである。

それから30年あまり、19世紀末には、極東とくに満州におけるロシアの脅威が見逃せないものになってきていた。ことに1899年に起きた義和団事変解決の密かな見返りとして中国北部の満州を獲得したロシアに対して、日本とイギリスはなんらかの対抗策を打たねば、という意向で一致し始めていたのである。当時南アフリカでボーア戦争の泥沼にはまりつつあったイギリスは、単独では中国における覇権を維持できず、極東におけるロシア監視役として、日本の協力を必要としていた。植民地弁務官ジョセフ・チェンバレンは非公式にではあるが、駐英公使の加藤高明に対して「将来的に有望な同盟国日本」との合意に達する可能性がある、という示唆的な発言をしている（Tsuzuki, 167）。

日英同盟の具体的な準備が行われたのは、1900年から1906年にかけて駐英公使であった親英派の外交官、林董が在ロンドンであったときのことである。義和団事変による西欧各国への中国の損害賠償を定めた北京会議が1901年に終わったが、その経過で起きた「三国干渉」によって再びロシア脅威を認識し始めた林に、一時帰国していた駐日イギリス公使のクロード・マクドナルド（先の義和団事変当時、包囲された大使館内にいた）が接近し、イギリス政府は日本との同盟調印への準備に入ったことを告げた。林の通達によってこれを知った日本の元老会議も、イギリス側の提案を合議し始めた。

ロシアとの協調政策に傾いていた伊藤博文は1901年秋ロシアを訪ね、外相、財務相と会談するが、ロシア側の応対に失望する。一方で、訪欧の最終目的地ロンドンでは当時の首相ソールズベリに歓待され、日英同盟の実現の可能性がはるかに高いことを認識した。明けて1902年１月30日、日英同盟は調印され即日発効した。この同盟はまず５年間実働し、相互の港湾使用や艦隊への燃料補給を義務づけたもので、２年後の日露戦争では大いに日本を助ける結果となる（Tsuzuki, 169）。こうした国際社会を背景に、1898年まで２度総理大臣を務めた松方正義が旧薩摩藩士であったこと、また彼が日露戦争開戦の主唱者であったことを考えると、その松方の依頼で、駐日イギリス公使マクドナルドの人脈を通じて薩摩藩の子弟教育のために派遣されてきたイギリス人婦人家庭教師、エセル・ハワードの存在は、幾重にも象徴的といわなければならない。

以上のような当時の国際情勢を見てくると、ハワードの見聞録の第18章「朝鮮への旅行」が、この書を特徴づけている政治的穏健さとユーモラスな基調を乱すように感じられる理由も、わかってくる。彼女は1907年、島津家の男児３人を韓国（当時大韓帝国は日本の植民地政策下にあった）と中国（満州）にいわば精神修養の旅につれてゆくが、章の冒頭には「私にとって、これら貴族の子弟の教育に捧げた私の永年の仕事の最後を飾るもの

という思い」で遂行されたという記述があり、ハワード自身が抱く旧弊な封建制度へのノスタルジーを色濃く感じさせる。「日本の勇敢な兵士たちがあのように雄々しく戦い、そして死んでいった戦場の跡を訪ねることによって……天皇陛下と祖国と同胞へ奉仕すべき義務を負っていることを深く心に刻みつけるのが、この旅の目的であった」（第18章、217）と彼女が日露戦争の道義を問い直すことなく回想する背景には、時代の空気、すなわち日本国内の反ロシア世論、韓国と中国への覇権拡大という欲望、国外では対ロシア共同戦線を条件に日本の「国際化」、すなわち一人前の国家として教育水準から軍事力にいたるまで指導し向上させることを約したイギリスの思惑が存在しているといってよい。

第３節　エセル・ハワードの日本観「風景・教育・風俗習慣」

３－１.

薩摩の大名島津家の家庭教師としてイギリスから招聘されたエセル・ハワードは、1901年に来日し、日露戦争をはさんで1907年まで在職した。22章から成るこの回想録の観察の対象は、女性ならではの日常生活の細々とした場面から、当時の国際情勢を反映した公的な場での政治家や軍人への批評にいたるまで多岐にわたる。この節では、ハワードの回想録を具体的に調べ、とくに「日本の風景」「教育」「風俗習慣」にまつわる記述に注目して章を分け、彼女の日本観を考察したい。

日本に到着したハワードが実質的に日本を目にする最初の地は神戸で、ここでの港の人足の印象は気味の悪いものであった。「その男がわれわれのほうに駆け寄ってきたとき、両袖がぶらぶらと揺れて、どうしても腕なしとしか見えない恰好であった」ので、彼女は「驚きのあまり飛び下がり、」日本通である同行の船客に笑われる。男は寒さから手を守り暖めるため、ねずみ色の綿入れの中に両手をたくし入れていたのである。また、寺の境内である女の子が赤ん坊を背負うスタイルで子犬を背負っているのを見て、それを奇形児だと思い込み「驚いて真っ青になった」(24)。

そんな無知な新参者ならではの「ダメな観察者」であることを告白するハワードの、専門的な観察者ではない、というこの態度こそが、受容する側である日本人との緊張関係を緩和させているとも考えられる。もちろん、回想録には書き手の選択意識や記憶を美化したい欲望が働くものであるし、見る／見られる者の間の不平等な関係は当然生まれてくる。しかし、当時の男性の旅行記はもちろんレディ・トラヴェラーの記述にも、イギリス人の尊厳あるいはそのイメージを崩さないように大きな注意を払ったことが見いだされることと対比すれば、ハワードの書き方には、「民俗学者」や「外交官」という職業者のもつ権威の感覚が薄い。そこには、生身の人間が異質な世界で感じるショックや苦労が前景化されており、むしろ宣教者の苦労譚、といった趣である。たとえば、最終地点の横浜港に到着したときに富士山を宗教的な感慨をもって眺める、という回想の記述で、ハワードの持つ「低い」視点を読みとることができる。

われわれは、二月十七日早朝横浜に到着した。同行の友人たちが日本で一番美しい山である富士山を見ましょうと誘ってくれたので、甲板へ出てみた。山は雪にすっぽり覆われ、その斜面に朝日が輝くのが見えたとき、なんとすばらしい景色であろうと思った。この時の印象は、おそらく一生忘れられないだろう。私はいつも寂しく頼りない気持ちになると、「私は山に向かって目をあげる。わが助けはどこから来るであろうか」という詩篇を思い出す。そして、そのとおりにしたものだった（25）。

マリー・ルイーズ・プラットの指摘のとおり（Pratt, 202）、ヨーロッパの旅行文学の伝統では、高みから異国の風景を見下ろす、という仕草はしばしば、その風景を「発見」し、象徴的に「征服」することに他ならない（小沢、113）。それに比べてハワードの記述は、「私」は富士山に向かって「見上げる」、つまり異文化に対しては「低い」者であり、キリスト教的な文脈でも「目をあげる」、つまり「助けを乞う」者として自分を意識している点が特異である。

その後も、出迎え人を探し出したものの「われわれは握手を交わし、彼は英語で私に話しかけたが、私にはほとんど一言も理解できなかった」（25－26）という記述があり、母国語への逃避とその失敗、という心理的な動揺が描かれている。また汽車の切符を見て「それは『発行日限り通用』と印刷され、英国の切符とあまりによく似ていたので大事にとっておいて、降りるときも渡したくないくらいであった」（26－27）と述べたときのハワードの心情は、鉄道システムに象徴される祖国、先進国イギリスに対するホームシックの様相を呈している。そのホームシックを和らげたのは、英国公使官邸で引き合わされた教え子、島津公爵家の 4 人の少年たちの可愛らしさであった。しかしここでも、彼らの描写は「華族学校の初等科の制服を着ており、それは赤い縁取りの入った黒い制服で、英国の郵便配達夫の服装によく似ていた」（29）と、祖国の風物を比喩に用いずにはおられない彼女の心境が強調されている。

また、これが到着の場面であることも重要である。プラットによれば、古典的なエスノグラフィーにおける到着の場面はそれ以後に展開されることになる民族学的記述が、民族学者本人の自伝的経験から生み出されたものに他ならないことを強調することで、その記述の真正性を保証するという重要な役割を担っている、という（小沢、114）。ところが、ハワードの『日本の想い出』の日本到着の場面において「私」は心理的に脅かされ、驚愕し、頭を垂れる、弱い存在として描かれているのが、当時のイギリス人による見聞録としては特異な点である。

とはいえ、外国の見聞録である以上、語り手の個人的な体験が異文化摩擦という高次の現象を表象するのは当然である。続いてハワードが語る苦難のほとんどが「英語が話せない日本人たち」に囲まれた孤独感との葛藤であることは、帝国主義時代のイギリスの植民地政策（日本は厳密には植民地ではないが）の最前線に置かれた「弱い」人間のジレンマ

の戯画であるといえるだろう。そして、その西欧化教育が広めた文明（物質）と文化（精神）のバランスの悪さが、通訳として雇われながら「全く言葉の通じない」女中コマ、ハワードが「幸福に居心地よく過ごせるよう」注意深く整えられた寝室の、ヴィクトリア朝のインテリアに欠かせなかった「ベルギー製のカーペット[6]」、水の出ない飾り物の蛇口が二つ付いた「英国式のバス（タブ）」、ナイフとフォークを使ってはいるが「大いに改善の余地があった」島津家の子供たちの食事作法などの、ちぐはぐな珍現象に現れている。西欧式の生活マナーを教えようにも、その土台である「言語」は届いていない場所に、彼女の葛藤は起因している。

ハワードが旧弊さの残る旧薩摩藩の旧家で外国人の家庭教師として成功してゆくカギは、彼女がこの日本の文明開化の実態を汲み取り、周囲の日本人の不条理にみえる振る舞いを絶対的に正しい西欧人の目から見て「異常」であるとか「理解不可能」とは決して表現しなかったことだろう。言葉が通じない環境にあって、なお共通の人間性を見出すには、まず自分が「見られる」必要があった。この点で興味深いエピソードとして、盆栽の話がある。東京の島津家の屋敷でその室内のみすぼらしさに驚き失望していたハワードが唯一美しいと思ったのが、食堂の片隅に置いてあった梅の木の盆栽であり、「それを見ていると、お伽の国を覗いているような」気がして眺めていた。すると、「しばらくして私の寝室にも同じような盆栽が置かれたので、私の鑑賞眼を彼らが認めてくれたことがわかった」。これはいわば、本来優位に立っている（見る）べき先進国がその文化を教えるべき「未開」の相手から認められる（見られる）、そして見られた、という事実をまた感知する、というミシェル・フーコーが主張したところの「視線の支配力学」が働いた、異文化交流においては重要な瞬間であったといえるだろう。

語り手ハワードが社会的・心理的に「弱い」立場として日本の風景や事物を見ることにより、本書はヨーロッパ人によって書かれた多くの伝統的な紀行文・見聞録が示してきた西欧中心主義の体験談とは一線を画している。ここでは異文化体験とはルールの無い試合であって、相手を見ようとする両サイドの「窯変」を促すものだということが明らかにされている。

3－2.

これまで説明してきたように、『日本の想い出』は外部から来た「弱い者」による変則的な見聞録と考えることができるが、招聘された目的である日本の大名子弟の「西洋教育」という点においては、ハワードは優位者である。そのヴィクトリア朝的な超「正道」な教育方法が、むしろ実験的に見えるのが興味深い。たとえば、「男の子らしい性向をのばして」やるために、ハワードは昔かたぎな藩の年寄りたちの猛反対と、自身の内心の不安と恐怖を押し隠して、子どもたちに木登り、乗馬、射撃、水泳、ボート漕ぎからヨット帆走にいたるまで体を張って指導する（158－160）。こうしたハワードと屋敷の使用人たちや子どもたちとの具体的な対話、行った教育的指導の内容、そして教育の一環としての

旅行体験の記録が本書の核にあたる。第5章は「子供たちとの生活」と題され、子どもたちを「西洋式に教育する」苦労や、滑稽な勘違いの数々など、ほほえましいエピソードがつづられている。興味深いのは、彼らの関係が西洋対東洋、教師対生徒、という支配的な図式が与える印象よりも、はるかに穏やかで文化的制約の少ないものである点である。

ハワードにとって「身分の高い」階級の子弟を、本来イギリスのブルジョワ階級の規範である「リスペクタビリティ」に沿って養育するのは重責であったに違いないが、彼女はその洞察力をもって適切な対処で切りぬけてゆく。しかしまた子どもたちの方にも、異なる文化を想像する力が育まれていることがうかがえる。たとえば、その行為のもつ文化的な意味の違いとショックを考え、ハワードは来日したときから子どもたちにキスはしないと強く決心していた。しかし、子どもたちは簡単にその境界線を越えてみせるのである。

> しばらく経ったある日のこと、ガッティ夫人の『自然界のたとえ話』を声高に読んでやっていたとき、驚いたことには末の子が私の手をつかんで、キスしたのだった。それ以前のある日、私の所へ友達が来た際、私が当然のこととして彼女にキスしたときには、子供たちからどっと笑い声が起こったのであった。そして、後で「どうしてあの人は先生を舐めたの」と聞くのだった。これが、子供の目にした初めてのキスだったのだ。しかし、彼の鋭敏な感覚はそれを愛情の表現と感じとるのにいたったのであった。(74)

また、ハワードはキリスト教について子どもたちに話すことを禁じられていたため、道徳的な問題についての質問への答えに窮する場面がしばしばあった。ある日、いじめられていた猫を庇う彼女に、子どものひとりが突然「先生はクリスチャンだから、あの猫を可愛がるのですか？」と尋ねる。儒教的な沈黙と瞑想のうちに日々を過ごすよう躾けられてきた彼らには、絶対的な存在に対する個人の責任、という観点からの「善行」は新鮮な概念だったのである。とはいえ、ハワードが無条件にキリスト教を絶対化していたとは思われない。それは第13章の「日本人と刀」において、ある若い日本人の貴族との対話のなかで、キリスト教の祈りは「静かに心の中で称えるのだ」というハワードに対して、その若者は父親からもらい受けた刀を「自分の部屋にいつも（その刀を）掛けておいて毎晩それを持って立ち、一日を振り返ってみて刀に値しないようなことを何かしたか反省するのだ」と語ったという（163)。ここでハワードは、歴史の異質さや教義の違いといった点を越えて、自分の具体的なふるまいを律する内的な行為の具現を「日本の刀」にも見出している。

彼女の柔軟な感性を示すもう一つのエピソードは、感情教育にまつわる苦労に関するものである。封建制度の名残りの強い当時の日本において、彼ら名家の子弟は、他人の前で喜びや感謝の意を表すことは好ましくないと教えられて育っていた。当初はそれに驚き、憤慨していたハワードも、やがてそれが単なる無作法ではなく文化と習慣の違いであるこ

とを認識し、すこしずつ「西洋式に」喜怒哀楽の感情を表すことを教えてゆく。ところがその教育の結果、子供たちは長いあいだ束縛されてきた自然な感情をあらわにし過ぎることがあり、ハワードとしては皮肉にも、家じゅうに鳴り響く笑い声や泣き声を「あまりに品がなく卑しいと思われないように、抑止しなければならない」こともあった（81)。このように内面の文化的境界線の柔らかさが相互理解への努力を可能にするが、また同時に、そのような努力、すなわち異文化のひとである相手の立場やものの考え方に対して想像をめぐらせるという行為こそが、異文化間の境界線を柔らかくするともいえる。

それにしても、本書において、先進国イギリスからの家庭教師と日本人の子弟との人間らしい交流と、それを可能にする双方の寛容な想像力と互いに対する畏敬の念が繰り返し語られることは、どのような意味をもつのだろうか。

論者の意見では、このようなハワードの姿勢は、イギリスと明治日本の関係が支配被支配の一方的なものでなく、日本の文明開化と帝国列強への参入はイギリスと日本の「共同作業」であったと考え、イギリス中心の歴史観に対する修正を目指すものである。明治40余年で達成された日本の目を見張るような近代産業国家への変貌は、イギリスの教育的指導に多くを負っている、という考え方が、19世紀から20世紀の変わり目のイギリスでは一般的であったという。帝国大学工部省の実質的な初代校長であり、日英関係に大きく貢献したヘンリー・ダイアーは、折りしもハワード在職中である1904年に出版した著書『大日本』に「東洋のイギリス」という副題を添えた。そして、この命名は日本人の賛同も得たと見え、当時の中学校の地理の教科書（1896年発行）には次のような一節がある。

> 一般的にいってイギリスはわれわれ日本になぞらえることができる。日本とのこの類縁性は、島国、大陸との関係、その領土と人口の規模、海洋性の気候と海岸線の性質といったイギリスの特徴をなす諸点で特に顕著である。それゆえわれわれは、イギリスは西欧の日本であるというべきであろうか。（イギリス人は日本を東洋のイギリスとみなす）（チェックランド、276）

上の引用からわかるように、イギリスと明治日本との出会いとそのゆくえには、奇妙なところがある。当時のイギリス側の交渉者（エルギン卿、パーマストン卿ら）はもちろん対外強硬政策を推進する帝国主義者ではあったが、実際に日本で科学技術と西欧思想や言語の移植につとめた「お雇い外人」は多分にヴィクトリア朝後期の理想主義と進歩主義を抱いた善意の人たちで、相対する日本人は、西欧諸国を大いに楽しませ、助けたい気持ちにさせる優秀な生徒だったという（チェックランド、290)。また、19世紀後半にヨーロッパを席巻した芸術面でのジャポニスム（日本趣味）ブームが生み出す日本観 —— 墨絵や木版画、陶磁器に描かれた植物モチーフの模様のように「変化しない、また変化していない静態的社会」というイメージ —— に目をくらまされたイギリスは、日本がほんの一世代で富国強兵を成し遂げ、当のイギリスの競合相手になるなど想定もしなかった（チェッ

クランド、279)。「東洋のイギリス」、「西欧の日本」などと言い交わす「自称」強者同士のややロマンティックで自己欺瞞的な相互認識から、ハワードと島津家の子弟の人間的な交流が生まれたことは歴史の不思議である。

3－3.

ハワードが自分と教え子たちとの人間的な関係を強調するのはなぜか、という問いに、前章では、そこには当時のイギリスの技術移植に偏重した西洋中心主義・物質主義に基づく文化交流を修正する意図があったから、と答えた。しかし語り手のその意図がもっとも鮮やかに読者に印象づけられるのは、皮肉にもその意図が挫折するとき、自分を含めた西欧人によって裏切られるときである。ハワードの任務が日本の若者を「西洋教育」によって改善し進歩させることであったことを考えるとき、その任務に充分に成功した家庭教師自身が「日本を内面化」させた自分を発見するということは、一種の敗北感を伴ったとしても不思議ではない。極東での同国人の失礼な振る舞いを不愉快と思った次の瞬間に、その不愉快さが自分にはね返ってくる次の一節は、「自分」というものの根拠の頼りなさを痛感させ、印象的である。

> ある日、子供たちと汽車の旅をしたときのことであるが（…）同じ車内の一人の婦人が、われわれの一行が大人数なので入っては困ると大声で抗議し、さらに一緒の車室にたくさんの小猿がいるのはいやだとつけくわえた。この言葉は、わたしの生徒たちにもはっきり理解できた。私はこのように西洋人が日本人のことを赤い顔をした日本の猿に似ていると言うのをよく耳にしたが、私が同じような経験をしていなかったらもっと驚いたに違いない。
>
> 全く日本人だけの間に数ヶ月暮らした後、ある日、鎌倉の海岸に出てみると、数人の外国人が木綿の着物を着て泳いでいるのに出会った。彼らの際立って青い眼や巨大な体格や赤ら顔は、その瞬間私に赤い猿を思い出させたのである。(135)（下線強調は論者）

このようにハワードは日本滞在中に、しばしば同国人であるイギリス人の無作法で敬意を欠いた言動に「大層恥ずかしく腹立たしい思い」(135) をさせられる。伝統的な価値観を持つハワードは外国にあってはしばしば日本人を擁護し、「植民地で会うようなタイプの人間は、本国の人間とは全然違っていて、その特性を少しも具えていないのだと人々を説得する」ために骨を折ったという (134)。

しかし、日本に伝えるべき伝統的なヴィクトリア朝イギリスの世界とその価値観を取り戻そうとする試みは、失敗する運命にあった。なぜなら、20世紀初頭のボーア戦争敗退など象徴的な出来事の積み重ねにより、ハワードが精神の拠りどころとする「本国」自体の価値観・倫理が大きく変化していたからである。そのことを示唆するように、ハワードが

日本で出会った若い西欧人女性たちの驚くべき振る舞いについてのエピソードが、先の引用の続きにあげられている。一人目は欧州社交界では有名な「非常に活発で威勢のよい性質で、海外で出会うことの珍しくない超近代派に属する」若い女性で、公式の晩餐会の席上でふざけて、自分の白粉用のパフで隣の紳士の顔をはたいた。これを「この種の女性は海外に出ると、社会の慣習を無作法に無視することを、自分の誇りとする人たちなのである」とハワードは厳しく批判している。またあるとき、燃えさかる火の上を飛んで歩く仏教の厳粛な儀式に参列していたハワードは、「あるきわめて近代的な女性の旅行者」が「突然靴と靴下を脱ぎ捨て、回りの外交官や他の観衆の茫然として驚くのを尻目に、裸足でこの芸当をなしとげた」のを目撃し、「列席したきわめて感じやすい日本の人たちの心中はどんなであったか」とても言い表せない、と憤慨している（136）。

上記の例に挙げられたいずれの女性も、古い世代からはいわゆる「ニュー・ウーマン」の典型的なすがた、と考えられていた人物像である。一方でハワードは日本人の女中「ハナ」を回想するが、その人物はあたかもヴィクトリア朝の女性モデル「家庭の天使」の具現化である。いわく、その気立ての良さ、勤勉さ、亡き母親に代わり家の中心となって兄弟を養う自己犠牲の精神と、勤務時間外に英語を独学しようとする向上心、雇い主ハワードに倣ってキリスト教徒になる無邪気な信仰心――「神様がちゃんとうまくしてくださいますよ」――。後に再来日した折に重病にかかったハワードを看病し、その回復を記念して、家の家宝だという貴重な品を贈ってくれる女中ハナは、ニュー・ウーマンの出現に押されて本国でも消滅しつつある、ヴィクトリア朝的価値観と道徳の体現者ではないだろうか。いまや語り手の「私」は、彼女が信奉してきた過去の祖国も、西欧化してゆく以前の「無垢」な日本も、取り戻すことが不可能であることに気づきはじめている。

第 4 節　明治日本の「異文化受容」のゆくえ

エセル・ハワードが来日した1901年とは、年明け早々にヴィクトリア女王が崩御した年であり、当時ロンドンに留学中であった夏目漱石が、帝国イギリスの衰退を感じとったことはよく知られている。続く1900年代には、遠く今日にまで延びる近代化の道が整えられ、第一次世界大戦までの束の間、楽観的な気分と迫り来る近代化への不安が共存していたことが、ハワードの在日した数年間の刊行物にも見てとれる。1901年にはキプリングの『キム』、1902年にはコンラッドの『闇の奥』、1903年にはギッシングの『ヘンリ・ライクロフトの私記』、1905年にはベアトリクス・ポターの児童文学『ピーター・ラビット』が登場し、同年にはアインシュタインの『相対性理論』が発表されている。その間、日本は1902年の日英同盟締結を経て、1904年には日露戦争に勝利するが、その戦後処理と不平等な条約内容に反発して、国内には開国後はじめての排他的ナショナリズムが生まれてくる。日英同盟によって双方の親日感、親英感が最高潮に達し、イギリスのエドワード七世から明治天皇へのガーター勲章（当時西欧の皇室・国王にしか授与されていなかった）の贈

呈があった1905年の日本の社会的な騒動は、A・B・ミットフォードら当時のイギリス外交官の回想録にも詳しく報告されている。

ハワードの「世の中で占めている地位によって要求される社交的な務めのより広い側面に順応させる」という教育計画が功を奏し、教え子のうちの長男であった島津公爵は、後にサンフランシスコ市の歓迎晩餐会で海軍を代表して英語での簡潔で高尚なスピーチを行い、好意的な報道記事を書かれるなど、国際的交流におおいに貢献した。その公爵によるスピーチの一節を引用して誇らしげに紹介している（275）ハワードはかつて、「東と西の架け橋をつくることができたとすれば」価値のある仕事である、との奨励を受けて日本に来たことはすでに紹介した。この回想録の語り手「私」は、イギリスと日本とのあいだの言語の障壁をはじめとする差異と断絶を一旦は認識しながら、ことばやイメージの流用によってその近似性を示唆する。そして、自分が体現する19世紀イギリスの教育哲学の後継者として若い国際的な日本人を養成することで、「私」は失われた過去の祖国イギリスと現代世界とを連続させることに成功したといえるだろう。

本書の末尾には松方正義侯爵からハワードへの公式な感謝状の全文が掲げられており、ハワードの喜びの大きさが伺えると同時に、西洋文化の受容を急務と考え、保守的な大名家の子弟にイギリス人（しかも女性）の教育係をつけることを実現させた、当時の政治家たちの大いなる「賭け」の重大な意図にも気づかされる。感謝状の「(…) 貴嬢は誠実と熱意に溢れかつ辛抱強いやり方で、侯爵と弟君の勉学のみならず健康の管理までも、根気強くまた細心の注意を払って従事されたことによって、貴嬢の努力は成功の実を結び、(…) かかる立派な成果を生んだのは、貴嬢の該博なる知識と豊かなる経験のお蔭であることはもちろんでありますが、それに加えて公爵と弟君の教育に対する貴嬢の熱意溢れかつ自己を捨てた献身の賜であると信じております」(287－88) という文章からも、旧弊な道徳観の持主である松方が高く評価しているのはハワードの「ニュー・ウーマン」としての一面を示す専門的な知識よりもむしろ、彼女の誠実さ、献身、辛抱強さ、熱意といった、ヴィクトリア朝に信奉された特性であることが伝わってくる。この前年の1907（明治41）年、ハワードは7年間の勤務を終えて帰国し、婚約者ハリー・ベルと結婚した。

こうして、教え子を通じて達成されるべき「先進国」の代弁者としてイギリス人ハワードが献身的に日本人に伝えたものは、実質的には前世紀の遺産であるヴィクトリア朝文化の精神であった。この矛盾する性質をもつ任務のはざまでハワードが行った日本人教育は、ある意味では当時の本国イギリス社会の抱えた美点と欠点、進歩と衰退の諸相を反映する鏡像であったと言えるだろう。ハワードは自分の体験を若い教え子たちの成長と自立、国際社会への飛翔に重ねて描くことで、ヴィクトリア朝の終わりとともに揺らぐ「イギリス人・未婚女性・職業人」といった重層的なアイデンティティを再構成しようと試みた。そのため、この回想録自体もまた、一筋縄ではいかない多面体である。しかし本書は、時代のはざまで新世代の教育にたずさわる女性として、あるいは覇権の陰りを見せはじめた先進国の国民として、多義的な存在であることを引き受けながら、知性、ユーモア

と強い意思で、可能なかぎりの自己実現を願った一女性の記録であることは間違いない。

注

1）20世紀初頭にイギリスで出版された多くの「日本見聞録」がステレオタイプであることを嘆く、これもイギリス人婦人による回想録に次のようなコメントがある：「しかし不幸なことに、［日本から帰った］旅行者はきまって二通りの極端な印象を持ち帰る―お決まりの観光コースに目を見張る詩人や芸術家、彼らは外面の様式美に気がつく程度の日数しか滞在しないから、日本については美しかったこと、ピクチャレスクな魅力のことしか言わない。残りは、長く滞在し過ぎて結局のところ巻紙しか思い出せないような、救い難い悲観主義者たちである。」（Evelyn Adam, *Behind the Screens ―An English Woman's Impressions of Japan*, New York&London：G.P.Putnam's Sons, 1910.）

2）コヴェントリー・パットモア（1823－96）はラファエロ前派の芸術家たちと親交があったヴィクトリア朝後期の詩人。代表作『家庭の天使』（1854－62）は結婚愛を神聖化する内容で、ヴィクトリア朝の理想の女性像を提示したものと考えられ、広く反響を呼んだ。近年では、それが当時の女性への社会的抑圧を助長する言説となったとの解釈が主流である。

3）シャム国王の宮廷の家庭教師といえば、ハリウッドで映画化された有名なミュージカル『王様と私』（1956）の原作『シャム宮廷の女家庭教師』の著者、アンナ・レオノーウェンスがいる。井野瀬久美恵『植民地経験のゆくえ―アリス・グリーンのサロンと世紀転換期の大英帝国』には、レオノーウェンスがイギリス人とインド人との混血であるという出自を隠蔽してアジアで任務につくことにより、「純粋な白人女性」というアイデンティティの確立を図った経緯が詳細に述べられている。

4）エセル・ハワード、『明治日本見聞録～英国家庭教師婦人の回想』（講談社学術文庫、1999）、p.13。以下、本書の引用はすべてこの翻訳版から、引用の直後に括弧付きの数字でページを示す。なお、原書は国際交流基金ライブラリー保存庫が所蔵。

5）その「内部」と「外部」を同時に背負う存在は、当時の文壇の帝国主義的情緒を代弁していたとされる作家キプリングの創出した無邪気な大英帝国のスパイ「キム」を思わせるが、実際、「東西な架け橋をつくる云々」というアーノルド卿のことばの底には、明らかに「東は東、西は西、(…)」というキプリングの有名な詩句の精神がこだましている。実際ハワードは、島津家の子供たちに英語教育の一環として、当時イギリス本国で大人気を博したキプリングの『ジャングル・ブック』を読み聞かせている（64）。

6）日本の日用工芸品を賛美するキプリングによれば、ヴィクトリア朝風の調度品は先進国になるための「貧弱このうえない代償」であった―「(…) 全世界を手に入れたのは私たちのほうだった。こうして私たちの世界には、花の形をしたガラスのランプシェード、ピンク色の羊毛のマット、赤と緑の陶器の犬、そして毒々しい色のベルギー絨毯が登場したというわけである」（コータッツィ、ウェッブ、58）。

引用・参考文献

第一次文献：

Howard, Ethel, *Japanese Memories*, London：Hutchinson and Co., 1918.（エセル・ハワード、島津久大訳『明治日本見聞録～英国家庭教師婦人の回想』、講談社学術文庫、1999年）

第二次文献：

Bird, Isabella L., *Unbeaten Tracks in Japan*：*An account of Travels in the Interior, including Visits to the Aborigines of Yezo, and the Shrines of Nikko and Ise*, London：Turtle, 1885.（イザベラ・バード、高梨健吉訳『日本奥地紀行』、平凡社ライブラリー、2000年）

Checkland, Olive, *Britain's Encounter with Japan, 1868-1912*, London：The Macmillan Press, 1989.（杉山忠平他訳『明治日本とイギリス～出会い・技術移転・ネットワークの形成』、法政大学出版局、1996年）

Dyer, Henry, *Dai Nippon*：*The Britain of the East*：*a Study in National Evolution*, London：Blackie, 1904.

Jayawardena, Kumari, *White Woman's Other Burden*：*Western Women and South Asia during British Rule,* London : Routledge, 1995.（『白人女性の新たな責任』）

Middleton, Dorothy, *Victorian Lady Travellers*, New York：Dutton, 1965；rep. Academy Chicago, 1982.（佐藤知津子訳『世界を旅した女性たち―ヴィクトリア朝レディ・トラベラー物語』、八坂書房、2002年）

Mitford, Algernon Bertram (a.k.a. Lord Redesdale), ed. Hugh Cortazzi, *Mitford's Japan*：*Memories and Recollections, 1866-1906*., London：The Athlone Press, 1985.

――, *The Garter Mission to Japan*, London：Macmillan and Co., 1906.（長岡祥三訳『ミットフォード日本日記～英国貴族の見た明治』、講談社、2001年）

Ponting, Herbert George, *In Lotus-Land Japan*, London：Macmillan and Co., 1910.（長岡祥三訳『英国人写真家の見た明治日本～この世の楽園・日本』、講談社学術文庫、2005年）

Pratt, Mary Louise, *Imperial Eyes―Travel Writing and Transculturation*, London：Routledge, 1992.

――, "Fieldwork in Common Places," James Clifford and George Marcus, eds. *Writing Culture*： *the Poetics and Politics of Ethnography*, Berkeley：University of California Press, 1986, pp.27-50.

Tsuzuki, Chuschichi, *The Pursuit of Power in Modern Japan*, Oxford：Oxford U.P., 2000.

井野瀬久美恵『植民地経験のゆくえ―アリス・グリーンのサロンと世紀転換期の大英帝国』、人文書院、2004年

小沢自然「過去と現在をつなぐ―アミタヴ・ゴーシュ『古の国で』を読む」、柴田元幸編『文字の都市―世界の文学・文化の現在10講』所収、東京大学出版会、2007年

コータッツィ、H、ウェッブ、G編，ラドヤード・キプリング、加納孝代訳『キプリングの日本発見』、中央公論新社、2002年

ジャヤワルダネ、クマーリ，中村平治監訳『近代アジアのフェミニズムとナショナリズム』、新水社、2006年